



朝日会館館長時代と
われる十河氏(十河家所
蔵)。本画像の作成に当
たっては佐々文章氏にご
協力いただいた。

いま十河厳氏に注目すること ～関学時代から戦後にいたるまで～

岡 野 宏・中 村 仁

私どもは現在「朝日会館・会館芸術研究会」という研究会に所属し、かつて大阪・中之島に存在した「大阪朝日会館」という文化施設と、そこで館長として活動していた十河厳氏に着目し、研究活動を行っています。本稿ではこの場をお借りして、研究会と十河氏の活動の紹介をさせていただければと思います。池田裕子さんはじめ学院史編纂室の皆様には、このような執筆の機会を与えていただいたことに深く感謝しております。

そもそも当研究会は 2009 年に東京大学大学院総合文化研究科所属の音楽研究学生を中心に立ち上げられた大阪出身の音楽家・貴志康一氏についての研究プロジェクトに端を発します。この研究プロジェクトのメンバーを中心に、あらためて 2012 年から雑誌・文学・美術・演劇・写真など幅広い専門家や関西在住の研究者を集め始動したのが当研究会です。



大阪朝日会館についても軽くふれておきたいと思います。朝日新聞社を運営母体とする本会館は 1926 年から 1962 年まで中之島に存在した総合文化施設で、展覧会場や公演場を備えるほか、独自の機関誌『會館藝術』を刊行していました。公演場では講演会や音楽公演、演劇公演、映画上映などが日をおかずに催され、関西圏における各芸術分野の発展におおきく貢献し、「文化の殿堂」と称されていました。

研究会のこれまでの活動としては 2015 年 3 月には東京大学駒場キャンパスにおいてシンポジウムおよび展覧会を開催しました。同年 8 月には朝日ファミリー・ニュース社の企画で大阪で講演会を開催させていただきました。さらに 2018 年 12 月には大阪大学豊中キャンパスにおいてシンポジウムおよび展覧会を開催しました。東京・大阪の両方で研究成果を公表する機会に恵まれたことは、とても大きな収穫となりました。また 2017 年からは、ゆまに書房から『會館藝術』の復刻版の刊行を継続しており(2019 年 4 月現在)、こちらも幸い多くの方に手にとりいただいているとのことです。



さて、なかでも私どもが関心を寄せているのが、第 4 代の朝日会館館長であった十河厳氏です。十河氏は 1904 年に神戸で生まれ、1982 年に神戸で亡くなった、いわば生粋の「神戸っ子」です。1924 年 4 月に関西学院大学の前身である関西学院高等商業学部に入學し、1928 年 3 月に卒業しています。関西学院がいまの上ヶ原に移転するのが 1929 年のことから、原田の森キャンパス(現在の神戸市灘区、キャンパス跡地は神戸市立王子動物園になっている)に通学していたことになります。

在学中、十河氏は勉学に加えて、様々なサークル活動に参加していました。ここでは代表的なものとして「絵画部弦月会」と「学生又新」「日本国際連盟協会」を取りあげてみたいと思います。

1915 年設立の学生美術サークル絵画部弦月会は現在でも活発な活動を展開しています。2016 年に刊行された弦月会の『創立 100 周年記念誌』にも、その活動は詳しく紹介されています。とりわけそのなかで育まれた吉原治良氏や竹中郁氏との交流は後年まで続くものでした。

「学生又新」とは 1927 年 11 月 28 日号より毎週月曜日に『神戸又新日報』の三面または四面に掲載された学生自身の編集による記事面です。『関西学院新聞部四十年』(1963 年、学院史編纂室所蔵)掲載の十河氏「学生記者のはしり」によれば、編集の関学代表が十河氏でしたが、業務の過酷さから脱落者が出て、そのぶん十河氏の負担が大きくなったとのことです。たしかに十河氏は卒業を目前とした 1928 年 3 月 5 日号に「回想と希望 『学生又新』の編輯について」と題した文章を寄せており、これは編集にあたって重要な位置にいたことをうかがわせます。記事内容は様々ですが、1928 年 2 月 20 日に実施

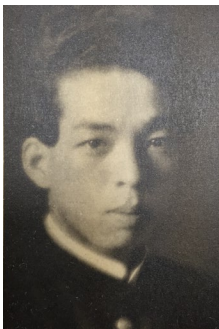
された第一回普通選挙についての学生の感想を数回にわたって掲載するなど意欲的な試みが行われています。

さらに十河氏は「日本国際連盟協会 関西学院学生支部」にも参加していました。同協会は 1920 年に設立された団体で、国際連盟の国際協調主義の理念を啓蒙する活動を行っていました。関西学院学生支部は 1924 年 11 月に設立されていますが、同支部の機関誌



十河氏と思われる人物の講演姿(『高等商業学部第十三回卒業記念アルバム』より)

『恒平』第 6 号(1933 年発行)は「十年回顧号」と題し、OB の回想を掲載しています。それによれば、十河氏は関学支部の設立時からの会員であり、当初には常務委員で「書記」を担当していました。とくに興味を引くのが、十河氏が執筆した「思い出の種々」のなかに出てくる学生支部の合同企画で開催した音楽会のことです。その音楽会は活動資金を得るために企画されたもので、なんでも「ヴキャナン」(不詳)という音楽家に出演を依頼したといえます。また講演部にも所属していたことから、講演会の企画作りにも当然携わっていたと考えられます。十河氏はこうした企画ごとに独特の才を発揮したようで、同号の岡崎三男氏による「学生時代と支部」には十河氏の横顔が回想されています。興味深いので、すこし引用してみます。



白面美髪的好男子。あの波打った房々とした頭髮は、毎朝コテをあてると皆信じていたが生まれながらと聞いて三嘆した。学院に集会のある時、何かの企てのある所、必らず彼がいた。弁論は素より、劇、詩、絵画、童話に至るまで通じ、旅行中も寸暇を盗んでペンを握っていた。筆者がはじめて演壇に立った時、原稿を添削してくれたのは彼であった。(以下略)

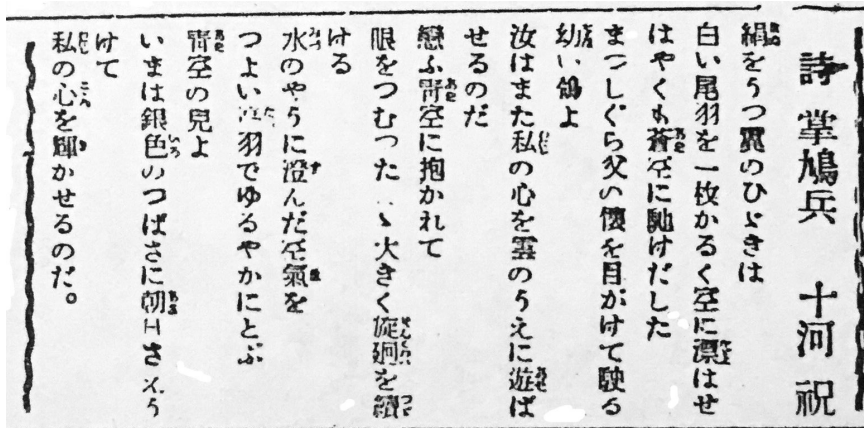
十河氏の卒業写真(『高等商業学部第十三回卒業記念アルバム』より)



こうした十河氏の学生時代の多彩な活動に見られる「自身で作品制作すること」「社会への関心」「企画することへの関心」はその後、朝日新聞に入社してからの活動にも反映しているように思われます。十河氏は社会部員として 10 年弱、勤務していましたが、労働問題を担当し、しばしば労働争議の現場取材をこなしていました。争議の取材は十河氏にとっても印象深いものが多かったようで、大阪社会部 OB による回想集『中之島三丁目 3 番地 大阪社会部戦後二十年史』所収の「松竹歌劇の争議と高野山

代表三僧の調停」では、1933 年に発生した争議の取材模様が刻一刻と変化する情勢とともに活写されています。現場主義の取材スタイルが十河氏の持ち味だったようです。

十河祝名義の詩作品(『神戸又新日報』1928 年 2 月 2 日付け掲載)





《プールの女性》1976年頃、油彩、キャンバス
(十河家所蔵)

十河氏といえば戦後の旺盛な抽象画制作が知られますが、戦前にも実作を継続していました。社会部在籍時代は、学生時代ほど絵画制作の時間を取れなくなっていたようですが、『ザラ紙随筆』（現代人社、1968年）という著作に所収の「似顔絵から抽象画まで」によれば大阪の朝日ビルにあった「N 洋画研究所」（中之島洋画研究所のこと）に通い、デッサンなどをされていたとのこと。1940年1月18日～23日にかけては美術新論社画廊で「十河巖従軍デッサン展」を開いています。また神戸支局に移った後、1941年には自身が撮影した報道写真によって本社写真賞を受賞するなど、制作方面でも才を発揮しています。

朝日会館館長時代には、後述するように多彩な企画を生み出していましたが、これもまた学生時代に音楽会などを企画したことなどに見られる、何かを「企画すること」への関心の延長線上にあるといえるかもしれません。



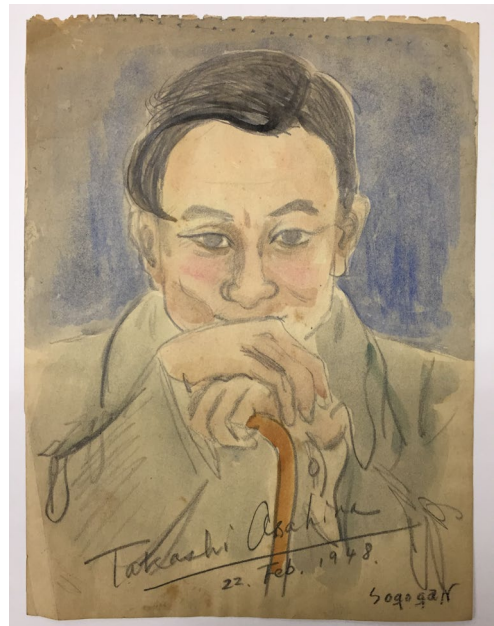
十河氏は1944年末から特派員としてジャワ新聞社に勤務し、雑誌『新ジャワ』の編集に携わります。ジャカルタで終戦を迎えた十河氏が日本に戻るのは1946年5月のことでした。そして同年9月、十河氏は戦前より関わりのあった朝日会館の館長に就任します。その後1953年1月に十河氏が館長を退任するまでの約6年半は、朝日会館の戦前に続く第二次黄金期とも言える時代でした。朝日会館はコンサート、バレエ、オペラ、演劇、映画など様々なジャンルの芸術興行により、終戦直後の人々の文化に対する飢えを潤す大きな役割を果たしたのです。

しかしその道のりはとても険しいものでした。空襲を免れ、占領軍による接収も免れた朝日会館は建物こそ無事に残っていたものの、終戦直後の混乱の中で定期的に芸術興行を続けるには多くの困難が存在しました。戦前のように海外から有名音楽家を招くことなど不可能でしたし、空襲によって破壊された社会インフラの中では、東京からオーケストラや劇団を招くことでさえ、考えられないほど多くの経費と労力が必要でした。さらに終戦直後の100%を超える入場税は、そもそも膨大な経費がかかるオペラやバレエ公演に、更なる大きな負担を強いるものでした。こうした厳しい環境の下で、十河氏自身の多方面にわたる人脈と様々なアイデアを通じて、朝日会館はそれまでにはない新しい芸術興行のあり方を生み出していくのでした。

十河氏が朝日会館館長として試みたことは、大きく分けると二つの柱によって成り立っています。一つは関西を本拠とした芸術団体の支援、もう一つは公演の受け皿となる聴衆団体の組織です。一つ目については、指揮者・朝比奈隆氏の率いる関西交響楽団（現・大阪フィルハーモニー交響楽団、1947年設立）、および関西オペラ（現・関西歌劇団、1949年設立）を積極的に支援したことが挙げられます。両団体ともはじめは朝日会館で公演を続けることで、その活動を軌道に乗せていきます。その際、朝日会館はホールを貸すのではなく、公演の主催自体を引き受けることで両団体を支援していったのです。十河氏にとってこうした支援は、関西発の芸術団体の育成に貢献するとともに、交通費や宿泊費など公演経費が嵩む東京の団体の招聘を少しでも減らすための方策でもありました。

公演の受け皿の組織化としては、まず朝日会館学生音楽友の会（AGOT）を設立し（1948年）、安価な料金で関西圏の中・高・大学生からなる多くの若い聴衆を動員します。さらに勤労者演劇協会（労演、1949年）、勤労者音楽協議会（労音、1949年）の設立も支援し、若い勤労者からなる演劇・音楽の聴衆たちに安価な料金による公演を提供します。特にAGOTと労音は設立数年で会員数が2万人を超え、朝日会館での音楽公演は、これらの聴衆のために同一団体で多くの公演を行うことができ、一公演当たりの経費

を安く済ませることが可能となりました。日本を代表するオペラ作品である團伊玖磨の《夕鶴》(1952年)は、十河時代の朝日会館のプロデュースによって生まれ、AGOT例会において初演された作品です。入場税によるチケット代高騰により一般公演の観客動員が伸び悩む中、朝日会館は若い学生や労働者による聴衆団体を動員することによって終戦直後の厳しい環境の中でも公演を続けていくことができたのです。そもそも戦前に労働記者として活躍していた十河氏には、芸術を限られたエリート層からより広い層に開放していこうとする意識が強くありました。十河氏が編集長を務める総合芸術雑誌『DEMOS』(戦前の『會館藝術』の後継誌)には次のようなマニフェストが登場します。「本誌は一般民衆の中に高い藝術が育まれてゆくよう読者の希望にこたえて、その手となり、足となってゆきたい」(『DEMOS』1949年4月号、「編集室より」)。労音や労演との関わりには、十河氏の労働運動自体に対する共感が明らかに存在したことでしょう。芸術の民衆化という理想と、戦後の厳しい財政状況を切り抜けていく文化経営のリアリズムという二つの側面が、朝日会館館長・十河氏の活動を支えていたと思われます。



十河氏による朝比奈隆氏のスケッチ
(十河家所蔵)

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

十河時代の朝日会館には、時代を代表する多くの日本人芸術家たちが集まってきました。その際、十河氏の館長就任が指揮者の朝比奈隆氏、バレエ・ダンサーの小牧正英氏といった戦中に上海や満州など中国大陆で活躍した芸術家たちの帰国のタイミングと重なっていたことも重要でした。さらに十河氏は朝日会館館長時代にも多くの美術家たちと関り、自身の創作活動も続けていきます。吉原治良氏には、朝日会館公演の舞台美術、公演プログラムや『DEMOS』誌の表紙画、挿絵、さらには朝日会館のホール緞帳図案(今日、西宮上ヶ原キャンパスの学生会館2階に同じ図案に基づいたモザイク壁画があります)など様々な形で協力を仰ぎました。「具体美術協会」誕生(1954年)前夜、吉原氏が芦屋市美術協会や現代美術懇親会(ゲンビ)などを通じて関西圏の様々なジャンルの前衛芸術家を結束させる中、十河氏自身も吉原氏を通じて関西圏の芸術家たちとの交流を深めていったと思われます。十河氏はゲンビ展の会場審査員を務め、また自身の抽象画はゲンビ展に毎回出展されました。

1950年春に朝日新聞社主催によって西宮球場周辺で開催された「アメリカ博覧会」の際に、十河氏は宣伝部長を務めます。その際作られた小磯良平氏による公式パンフレット挿絵や前田藤四郎氏、川西英氏による記念版画絵葉書などには十河氏と関西画壇との関りの一端が窺えます。1948年に西宮球場ではじまる夏の恒例イベント「たそがれコンサート」なども含め、十河氏は関西の様々な芸術家たちと関りながら次々と新しい企画を打ち出していったのです。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

1953年に朝日会館館長を退任した十河氏は、朝日新聞社の企画部、社会部で働き1959年に定年を迎えます。その後はサントリー宣伝部の嘱託となり、さらに神戸オリエンタルホテル顧問をつとめる傍ら、画家としての創作活動も旺盛に続けていきます。1961年にはサントリーの派遣により、春から夏にかけてヨーロッパ13ヶ国の美術館を視察します。その紀行文は、十河氏自身の描く挿絵とともに『日本美術工芸』誌に「わたしの見た欧州」という題で18回に渡って連載されました。この頃、十河氏は地元・神戸の芸術家たちと共に兵庫県立近代美術館(1970年設立、現・兵庫県立美術館分館「原田の森ギャラリー」)の設立に尽力したと言われています。また労音主催によるミュージカルの台本を執筆し、晩年には「弦月会」OB会の会長も務めるなど、十河氏の活動は朝日会館館長退任以降も音楽、美術、演劇、

文学など幅広いジャンルを自由に渡り歩きます。豊かな芸術的感性と新聞記者としての現実に対する醒めた眼差しの同居がその活動に通底していました。



大阪の朝日会館は 1962 年に取り壊され、フェスティバルホールが「文化の殿堂」としての役割を引き継ぎます。十河氏が設立に関わった労音、労演は 1960 年代にピークを迎えますが、その後衰退していきます。時代は大きく変わり、新聞記者で、文筆家で、文化経営者で、絵描きでもあった十河巖氏の活動が今日顧みられることはほとんどないと言えるでしょう。しかし今から 70 年前、終戦直後の混乱期に自らの豊かな感性と経験、幅広い人脈を生かして大阪・中之島に「文化の殿堂」を築き上げた十河氏、このルネサンス的な万能人は、戦後文化の礎を築き、その草創期を支えた人間として、決して忘れられるべき存在ではありません。リニューアルされたフェスティバルホールの盛況、関西随一の伝統を誇る大阪フィルの発展、吉原治良氏率いる具体美術協会の国際的な再評価など、十河氏が戦後いろいろなところに撒いた種は、今日、各所で大きな花を咲かせているのです。

* 本研究は JSPS 科研費 16K02301 の助成を受けたものです。



学院史編纂室で資料調査中の中村仁さん(左)と岡野宏さん(右)。お二人には、十河巖研究の成果の一端を『関西学院史紀要』第 26 号(2020 年 3 月発行予定)にご寄稿いただくことになっています。

2002 年に私が初めて十河家にお電話した時、ご子息の新平さんとお話することができました。しかし、実際に十河家をお訪ねしたのは、その 15 年後のことでした。学院史編纂室に調査に来られた岡野さんから、ご遺族の紹介を頼まれたのです。2017 年 7 月、岡野さん、中村さんと一緒に十河家を訪ねました。絵画部 OB 弦月会事務局の佐々文章さんも同行してくださいました。新平さんは既に亡くなっておられましたが、奥様の韶子さんとお嬢様の浅井容子さんにお目にかかることができました。その時、拝見した貴重な遺品の数々(内 3 点は本稿で使用)を関西学院大学博物館にご寄贈いただけるとのありがたいお申しを受けています。
(学院史編纂室 池田裕子)



十河氏の著作群(執筆者所蔵)

◆ご紹介◆ NPO 法人 向日庵(こうじつあん)

向日庵とは、関西学院高等学部(文科)で学んだ**寿岳文章**(1900~92)の居宅です。1933 年、藤井厚二門下の建築家である澤島英太郎の設計により、京都府西向日に建てられました。

十河巖の 5 年先輩に当たる寿岳は、関西学院専門部文学部、旧制大学法文学部、新制大学文学部で英文学を教えたほか、和紙研究を通して民芸運動に貢献しました。ダンテ『神曲』の翻訳でも知られています。

「NPO 法人向日庵」は、寿岳一家の文化的業績を伝える活動を行い、民芸運動展開の場ともなった居宅の保存を目指しています。現在、会員募集中だそうです。詳しくは、ウェブページをご覧ください(<https://koujitsuan.kyoto/>)。